小学生を含む 3 世代家族の感情会話

異なる話者間でポジ・ネガ感情への言及文脈がどのように変わるか

岩田美保

(千葉大学教育学部)

キーワード：家族の会話，感情理解，児童期

Three generations of family conversations about Positive and Negative emotions

Miho Iwata

(Faculty of Education, Chiba University)

Key Words: family discourse, emotional understanding, childhood

目 的

人の感情理解は良好な社会的関係や社会生活の構築において極めて重要といえる。これまで、そうした感情理解を支えるものとして家族間の感情会話の重要性が指摘される中で、特に過去のネガ感情に関わる会話文脈が、感情理解において重要な意味をもつ可能性が指摘されてきた (Lagatutta & Wellman, 2002)。その理由として、そうした会話では、ネガ感情が生じた原因や背景などがより語られやすく、ネガ感情経験に関わる焦点化した議論がなされやすいことが挙げられている。一方、家族内での感情会話は、そうしたネガ感情だけでなく、ポジ感情も含め、さまざまな感情が語られるといえる。加えて、そうした感情会話の内容は家族内の在席者の違いによっても異なることが想定される。在席者の違いによりポジ・ネガ感情会話が実際にどのように異なるかについて着目することは、感情理解を支えるものとしての家族の会話の多様性について捉えていく上で重要な観点といえる。

こうした点をふまえ、本研究では、学童期の 3 人きょうだいをもち 1 家族の夕食時の会話において、平日に夕食をとることの多かった母子 4 者間および休日を中心とする父母子 5 者間、さらに、同時期に夕食時のみ共にする機会が増えた別棟に住む祖母と母子の 5 者間の夕食時の 2 年間のやりとりをふまえ、語られたポジ・ネガ感情への言及文脈にどのような違いがみられるかについて検討を行った。

方 法

観察対象者：首都圏に在住する学童期の 3 人きょうだい（長男 S、長女 M、次男 Y）を含む 1 家族
夕食場面の 2 年間の観察データ（家庭の了承を得た上で食堂にビデオカメラを設置し非参与観察を行ったもの）のうち、きょうだいが S（小 5）・M（小 4）・Y（小 1）期～S（小 6）・M（小 5）・Y（小 2）期にあたる 2 年間の会話（母子 4 者間 4 回、父母子 5 者間の 7 回、祖母・母子 5 者間の 15 回、全 26 回）のデータを対象とした。会話内容のトランスクリプトを作成し、Lagatutta & Wellman (2002)、岩田 (2013) を参考とし、家族のポジ・ネガ感情を表す言葉（楽しい・うれしい／いやだ、つまらない等）を抽出した。それらの言及について岩田 (2013) の「プラグマティック文脈のカテゴリー」に基づき、それぞれの感情言及が＜食事・指示＞、＜食事・好み＞、＜コメント＞、＜けんか・調整＞、＜楽しさ・ユーモア＞、＜情報・知識＞のうち、どのような文脈で話されたかについて分類し、分析を行った。

結 果

各セッション（母子間・父母子間・祖母・母子間）で語られたプラグマティック文脈ごとのポジ・ネガ感情別合計言及数について、セッション (3) × ポジ・ネガ感情 (2) の χ^2 乗検定を行ったところ、＜食事・指示＞を除くすべてのプラグマティック文脈において、セッションによる偏りが有意であっ

た (χ^2 (2)=13.07, $p<.01$; χ^2 (2)=10.09 $p<.01$; χ^2 (2)=5.09 .05 $p<.01$; χ^2 (2)=11.01 $p<.01$; χ^2 (2)=4.73 .05 $p<.01$)。＜食事・好み＞文脈では、母子間においてよりネガ感情が語られ、祖母・母子間において、よりポジ感情が語られている傾向が窺えた。＜けんか・調整＞文脈では、母子間・父母子間においてよりネガ感情が語られ、祖母・母子間においてよりポジ感情が語られている傾向が窺えた。＜楽しさ・ユーモア＞文脈では祖母・母子間においてよりポジ感情が語られ、またネガ感情言及はより少ない傾向が窺えた。＜情報・知識＞文脈では、父母子間でよりネガ感情が語られ、祖母・母子間ではよりポジ感情が語られている傾向が窺えた。総じて、特に、祖母・母子間においては、母子間や父母子間と比べて、多様な文脈でポジ感情に関わる側面が強調される傾向があることが窺われるものであり、セッションの違いに応じて、感情会話の様相が異なってくることが示される点で興味深い結果といえた。こうした、夕食時の話者メンバーが異なることにより生じる、プラグマティックな文脈の違いは、ポジティブ・ネガティブ感情に関する日常会話の多様性につながると考えられ、学童期の感情理解に極めて重要な意味をもつことが推察された。

考 察

本研究から、子どもが学童期の時期の家族の会話での話者メンバーの違いにより、ポジ・ネガ感情への言及文脈の違いがみられること、また、特に祖母を含む 3 世代のやりとりではポジ感情に関わる側面が強調される傾向が窺えた。こうした結果は、異なる関係を含む日常的な家族の会話が、より多様なポジ・ネガ感情についての理解を支える機会となり得ることを示唆している点で重要といえる。また、特に母子間においては、＜コメント＞文脈でネガ感情が話される傾向が大きいことが窺えた。同文脈は過去の経験や出来事への言及とも大きく関わる文脈であり、母子間では他のメンバー間と比べて、より感情理解において重要とされるやりとりがなされていることが推察される。一方、今回の検討は 1 家族を対象とした検討であるため、今後は他の多くの家族の会話ややりとりの内容も含めてさらに検討を行う必要がある。

引用文献

Lagatutta, K.H., & Wellman, H.M. 2002 Differences in early parent-child conversations about negative versus positive emotions: Implications for the development of psychological understanding. *Developmental Psychology*, 38, 564-580.

岩田美保 2013 母子 4 者間・父母子 5 者間で語られるポジティブ・ネガティブ感情：1 家族の夕食時の会話の縦断的検討. 日本家政学会誌, 64, 2, 75-88.

本研究は 2013 年度科学研究費補助金（基盤研究 C、研究者代表、岩田美保）の助成を受けて行われた。